

## 昭和46年度購入作品の報告

著者	山田 智三郎
雑誌名	国立西洋美術館年報
巻	6
ページ	3-5
発行年	1973-03-31
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1263/00000536/">http://id.nii.ac.jp/1263/00000536/</a>



ティントレット ダビデを装った若い男の肖像

## 昭和46年度の新収作品について

山田智三郎

Nouvelles acquisitions,  
par Chisaburoh F. YAMADA

国立西洋美術館は、昭和46年度には、7,000万円の購入費で、絵画3点、版画3点を購入した。以下新収絵画についてのみ簡単に説明する。個々の作品に就ては、将来館員による研究が期待される。また作品の細かいデータについては新収作品目録を参照されたい。

\* \* \*

ティントレット(1818—94)は、古い美術史ではルネッサンス最後の大家とされ、最近の美術史では、いわゆるマニエリズモの時代のヴェネツィア最大の画家とされている。この時代はルネッサンスの世界観の崩壊期であり、新しい近代的世界観誕生前のヨーロッパの精神の危機の時代であったが、彼はそうした時代を背景にティツィアーノのあとを受けて、この世界を、存在の世界としてではなく現象の世界として描き出し、また明暗のドラマチックな対照を精神表現にまで高めた画家である。彼は宗教的内容を劇的に表現した大画面によって名声を博したが、同時に優れた肖像画家としても定評があった。

購入した肖像画は、肖像の主を、ゴリアテを殺したダヴィデの姿で表現してあり、左手の背景に巨人ゴリアテの屍体と敗走する敵軍を動感的強い素晴らしい筆致で描写してあるので、ティントレット芸術の前述の二面が一図で見られる。その点当館のような小美術館にとっては都合がよい。同時に日本では見られぬヴェネツィア派の油絵技法を示すサンプルとしても優れていると考えて購入した次第である。

この絵は、ロンドンのナショナル・ギャラリーの館長を長くつとめていたルネッサンス絵画研究の権威ケニス・クラーク卿が所有していた

もので、同卿が引退後の余生を静かに送るため、城であった宏壮な大邸宅から、現在の邸宅に数年前移った際手ばなしたものである。

描れた時期は、かつてこの絵について論文を発表したフォン・デル・ベルケン(1540年代の後半としているが、バルッキーニは1550年代の後半としている。ウィーンにある有名な《スザンナと老人たち》と同じ頃の作ということになるが、バルッキーニのこの考えは恐らく正しいであろう。「ドラクロアを想わせる」(この絵について、筆者に寄せられたクラーク卿の手紙にある言葉)背景の戦闘図は1550年前の仕事とは考えられぬ。若者の持つ劔を最前方に出して、上半分だけを描いている構図も50年代のものと思われる。

肖像の主は、恐らくダヴィドという名をもった名家の青年であろうが、ヴェロネーゼの《毛皮をまとった男》(1565年作、ブダペスト、スツェプムヴェヌツェッティ美術館)と同一人物ではないかと言われている。クラーク卿の意見ではゴンツァガ家の一員であろうという。誰であるかは、今後の興味ある研究課題である。

\* \* \*

当館には、フランドル画派の作品は、ルネッサンス期に入ってから作家であるパティニールの絵が一点あるだけで、15世紀の初期フランドル画派の鋭い自然描写を日本人々に示す作品は、当館のみならず、日本に一点もない。その欠陥を補うために購入したのが「聖ルチア伝の画師」の作とされる《聖ヒエロニムス》である。

本図は、もとはより大きかったと思われる板絵の一部で、現存の部分は原画の約三分の二位

であろうか。同じ画家が描いた他の《聖ヒエロニムス》(現在2点知られている)の構図から考えると、もとは左手に十字架像が描れていたと考えられる。長さも、現状よりは下方により長く、聖ヒエロニムスの全身が描れていたであろう。左下方には獅子も描れていたと思われる。失われた部分は、恐らく破損がひどかったので切り取られたのであろうが、現存の部分の保存は非常に好い。汚れをクリーニングした後の現状は、原状をよく残していて、15世紀のフランドル画派の自然の真に徹した描写力を知るに充分である。ことに、あやめ、その他の植物の描写は素晴らしい。「聖ルチア伝の画師」の特徴の一つは、植物の描写の巧みさにあるとされているが、その特性がよく現われている。なお、フリードレンデルの『初期ネーデルランドの絵画』の新版の編者であるヴェルハーゲンは、この絵を「聖ウルスラ伝の画師」との共作と見ている(同書、第6巻B, 115, 116頁)。

この「聖ルチア伝の画師」は、15世紀後半の画家で、ブリュージュ市のサン・ジャク寺にある聖ルチア伝を描いたトリプティク祭壇(1480年の年記がある)にちなんで、この名で呼ばれているのだが、現在彼の作品と見られているものは10数点に達している。そのうちにはメモリンクやディルク・バウツやヴァン・デル・グースの構図を写しているものがあり、独創性は少ないが、画家としてかなりの位置をもったらしいことは、当時エストニアまで彼の作品が送られ、またスペイン絵画に彼の影響が見られることによって想像出来る。ルガーノのティッセン・コレクションにある《ピエタ祭壇画》、ワシントンのナショナル・ギャラリーにある《天上

のマリア》は特に優れた作品である。

＊ ＊ ＊

「聖ヴェロニカ」は、後述の如く、プロヴァンス派の作であるかについては問題のある絵であるが、15世紀後半の作であることは間違いない美しい絵である。レントゲン検査も行ったが、保存も非常に好いし、宗教的な感情が感性美を通して現れる後期ゴシック美術の特性が、その装飾的な美しい画面によく現れているので購入した。その感性美が、北方の後期ゴシック絵画とはちがった、南欧の明るさをもっていて、その点日本人の好みに合うのではないかという考えも、この絵を購入した理由の一つである。

本図はもとトスカナのアルノ河流域の一修道院にあったが、その後フィレンツェのサンティッシマ・アヌンツィアータ聖堂に移されたと伝えられている。今世紀になってからは、デュリユー伯夫人のコレクション、さらにドマンドルス・ドッドン伯の蒐集品中にあったことが明らかである。ボール・デュリユー伯は今世紀の初頭フランス15世紀の絵画についていくつも論文を発表している研究家であるから、彼がイタリアで発見したものかと想像もされるが、その点は明らかでない。

1952年から3年にかけて、パリのシャルバンティエ画廊で催された「宗教画100選展」は、ロジェ・ヴァン・デル・ヴェィデンの名作《最後の審判》が出陳されて話題をよんだ大展覧会であったが、そこに、この絵は「15世紀のプロヴァンス派」の作として出品された(カタログ番号40、挿図あり)。この絵には、様式的に諸流派の要素が見られるが、プロヴァンス派とするのは恐らく正しいであろう。ステルラン教授も

同じ意見と聞く。15世紀の後半に描れたものであろう。

アンジュー家のルネ王の下に栄えた15世紀のプロヴァンス派の絵画には、14世紀のシエナ派の流れも、新しい15世紀のイタリア諸派の流れも、さらにフランドル派の流れも多く入っていて、諸種の様式が行なわれて複雑である。シチリア王であると共にロレーヌ州の領主であり、またプロヴァンス伯として主としてアヴィニオンに住んでいたルネ王の複雑な位置を反映しているかのようである。《エクス<sup>1)</sup>の聖告

》などは、ブルゴーニュの影響の外に、明らかにコンラッド・ヴィッツの直接の影響が見られるが、その外にナボリの画家の影響もあると言われる。

本図の場合も、フランドル派の要素も、イタリア15世紀の影響も見られる。絵画技法もモデリングもイタリア風であるが、描れた人物のタイプはフランドル系のように思える。聖ヴェロニカの捧げる布上のキリストの顔は明らかに15世紀フランドルの系統のものと考えられる。ロジェ・ヴァン・デル・ヴァイデンの十字架上のキリストを主題としたトリブティク(ウィーン)の右翼の聖ヴェロニカの捧げる布のキリストの顔は、本図のキリストの顔に似ている。ロジェのフランドル画における影響は非常に大きいから、このキリストの顔が原型になったかと思われるが、15世紀フランドルの聖ヴェロニカのキリストの顔にはこのタイプの例がいくつかある。顔のタイプも、中央で分かれているあごひげも同じである。ついでながら東京国立博物館にあるキリシタン時代の《ヴェロニカの御影》は、このタイプに属していて、それが16世紀のスペインで描れたものであるにしろ、フランドル派

系の画家によって描れたものであることを示している。

ヴェロニカはフランドル派を思わせる形姿であるが、その美しさは全くちがったものであり、技法もやわらかいモデリングも、イタリア15世紀風である。ローマ大学のフェデリコ・ゼーリ教授はこの絵を見て、ファエンツァのロマーニャ派の作だろうと言われたが、このイタリア的要素が、ロマーニャ派のものかどうかは今後の研究にまきたい。いずれにしろ、このヴェロニカの控え目でありながら明るく、温和な感じでしかも優雅な美しさはわれわれの知っているプロヴァンス派絵画の持つ独特の美しさと共通するものである。特に、ニコラ・フロマンの作品の魅力に通じるものがあり、フロマンの大作《燃える木のマリア》の壮麗さこそこの絵にはないが、それと同じタイプの美しさをもっているように思われる。また、本図の、ふし目にして、幾分ななめにうつむいたヴェロニカの顔は、フロマンの《燃える木のマリア》のマリアの顔を想わせるものがある。この「聖ヴェロニカ」の作者はフロマンに極く近い人であったかと思われる。

ニコラ・フロマンは、プロヴァンスのウゼ生れであるが、フランドル派の影響下に主としてアヴィヨンで仕事をした。また彼のフィレンツェにある初期の重要作品(1461年)は、彼がイタリアにも行った可能性を示している。

以上は、本図を購入した際もった感想に過ぎずその製作地、時代、作者の問題は、今後の興味ある研究課題であるが、15世紀ヨーロッパの、中世的要素のなお濃く残った、宗教的感情のこもった美しく、愛らしい作品である。